

住民流がわかるアナログ思考

スローで考えよう



木原 孝久

住民流福祉総合研究所

住所/埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話/049(294)8284

「住民流」を生み出す思考法とは？

本書は、住民流という発想を生み出す元になる「ものの考え方」に迫ってみました。住民流がわかるための考え方ということです。

現代はデジタルの時代と言われています。コンピューターに倣って、あれかこれかと対象に白黒をつけることが、よしとされています。何についても分別的、分析的に考えるのが頭の良い人のやることだと。

一方の住民はその反対で、「アナログ思考」をしているようです。ものごとはそう単純に白黒をつけられるものではない、ファジーでグラデーションの中にこそ真実がある、と。今はやりの言葉で言えば「スローな思考」と言うのでしょうか。この「スローな思考」を身につければ、住民流は意外にわかりやすくなります。

●目次●

- 第1章 **統合主義**—ものごとはすべて包括的に見る<3>
- 第2章 **脱あれかこれか**—「あれ」と「これ」の間をファジーに考える<6>
- 第3章 **対決的思考**—相対する立場で闘わせてみる<8>
- 第4章 **矛盾も結構**—矛盾を矛盾のまま抱え込む<11>
- 第5章 **グラデーション**—黒と白の間に多様な灰色を考える<14>
- 第6章 **負の視点**—全てに負の部分を考えてみる<17>
- 第7章 **因果を逆転**—手段と目的、原因と結果を逆転させてみる<19>
- 第8章 **価値を逆転**—旧来の価値観を引っくり返してみる<21>
- 第9章 **機能主義**—カタチよりもハタラキで見る<24>
- 第10章 **首尾一貫**—当初の理念・考え方を押し通す<26>
- 第11章 **言葉にご用心**—あなたを縛る鎖が隠されている<28>
- 第12章 **風土を分母に**—人間の行動を文化風土の中で読む<30>
- 第13章 **人間というものは……**—まずは人間論から始めよう<32>

統合主義

ものごとはすべて包括的に見る

こんな新聞記事がありました。自分の娘がなにやらニコニコしながら帰ってきた。理由を聞いたら…電車の中でたまたま老人に席を譲ったら、なんとその老人からお礼の短歌を手渡されたというのです。

「込み合ひし車中にあれど スクッと立ち 年寄る我に席を譲りぬ」

娘は「今日1日、心がホカホカしてとてもうれしかったよ」。それを聞いた母親にまで「感謝の気持ちでいっぱい」と言わせるほどだったというわけです。

●「感謝」の方が「活動」を凌駕！

これをなんとなく見ていると「ああ、いい話だな」で終わってしまいそうですが、ここには不思議な事実が隠されています。私たちは普段、人へのやさしさ活動が行われたとき、そのやさしさを受けた人よりも、それを提供した人の方を評価します。それだけ「する」行為の方が「される」行為よりもエネルギーを消費するからだと、当たり前のように考えているのです。

ところが、この事例では、その構図が完全に逆転しているではありませんか。席を譲る方はただそれだけの行為である（むろんそれなりの勇気が要ったであろうが）のに対して、譲られた方はそれへの感謝の意を短歌に詠んでいます。こちらの方がはるかにエネルギーを消費しているではありませんか。その証拠に、譲った娘は1日ニコニコしていられたし、その話を聞いた母親までが「感謝」したくなるほどでした。こうなると、（老人の示した）感謝という行動は、ただ活動者へのささやかなお返しどころか、もう立派な活動の一つだと見てもいいのではないのでしょうか。

もしこういう発想になれば、介護サービスの現場でも、そのサービスを受けている要介護老人だって、それなりの「活動」をしているのかもしれない。それに気づいてあげ、当人にそのことを意識させてあげるのも、スタッフの大事な役割な

のです。

●最前線のボランティアしか評価しない日本

ボランティア活動といえば、「最前線」で活躍している人しか社会は評価しません。

アメリカという国を見ていると、後方支援どころか、活動の対象となっている人だって、立派に役に立っているのだといった言い方をします。ボランティア活動というのは、活動家のことだけを言っているのではなく、対象とされる人も、活動の側面支援や後方支援をしている人も、活動に助成をしている団体も、コーディネートしている人も、皆「活動」という営みに巻き込まれている当事者なのです。

私には「ケース」という言葉がひっかかります。サービスの担い手と受け手を峻別し、その上で、特定の対象者個人をまさに「特定」したものです。

特定の「ケース」が地域で周辺の人たちとどのように関わっているかを調べると、なにも「される」一方ではなく、「する」側にも回っているし、また他の人との関係も同じようになっているから、現場ではそうした複雑な相互関係がダイナミックに展開されています。その全体をこそ「ケース」と称した方がいいのです。

●会社の社会貢献と社員のボランティアは「相乗り」

私は本業型ボランティアというあり方を提唱しています。一般的には本業の中でボランティアをするという発想はありません。ボランティアというのは、あくまで家に帰ってから、日曜日などに個人の資格で活動に参加することだと。そして会社でやることは、企業としての「社会貢献」であって、両者は全く別物だと、誰もが考えているのです。

しかし現実には、そんなに単純に区分けできるものではありません。富士ゼロックスという複写機メーカーが、拡大写本グループには、営業所などに設置してあるカラー複写機を無償で使ってもらおうという「活動」をしています。これなら間違いなく「社会貢献」なのですが、この活動を始めた経緯を聞いてみると、一人の営業マンに行き着いたのです。彼の奥さんがたまたま一人の盲学生のために文字を大きく書き直した教科書を作るボランティアグループに所属していました。活動していてもなにか困ることはないかと奥さんに聞いたら、「写真やイラストを書き写すのが難しい」とのこと。「それならわが社のカラー複写機を使えばいい」と思ったのですが、

なにせ商売道具ですから、簡単に無償で使わせるわけにはいきません。営業所長に相談したら、その盲学生に限って認めようということになりました。

ところがその後、彼の奥さんはその作品を全国拡大写本ボランティア大会でみんなに見せてしまったのです。「そのカラー写真はどうしたの?」「富士ゼロックスでやってもらったの」。実際には条件付だったのですが、そのあたりが省略されて伝えられたので、皆地元の富士ゼロックスに「私たちにも使わせて!」と押しかけたので、現場は戸惑うばかり。そこでこの騒動の原因を作った営業マンが本社を説得して、これに企業の社会貢献として取り組むことになった、ということです。

このように、企業としての社会貢献と、社員としての個人ボランティアは、本業の場で行われている限り、どちらかに区別できず、一体のものと考えてのが妥当ではないでしょうか。私は「相乗りボランティア」と言っています。勤労者はなかなかボランティア活動に参加しないと言われますが、それは本業の中で無意識にやっってしまった部分を省いた結果であって、もし「相乗り」活動で考えれば、彼らだって「職務中に」取り組んでいるかもしれないのです。



物事を二項対立的に捉え、両者の違いを殊更際立たせようとする癖が、両者の全体に宿る真実から、私たちの目を逸らしているのでしょうか。真実はあくまで両者が係わり合い、統合されることではじめて正しく見えてきます。今必要なのはそういう姿勢なのではないでしょうか。

分析的頭脳から統合的頭脳へ。文明人に今、求められる最も重要な思考法です。

脱・あれかこれか

「あれ」と「これ」の間をファジーに考える

普段何気なく考えていることが、よく吟味してみたら必ずしも正しくない、ということがあります。例えば、「共助と公助は車の両輪」という言い方が以前からされています。住民の助け合いで解決できることは住民が担い、住民の手に余るものは公的サービスが引き受ける——という、なんだかスーッと納得してしまいます。あるいは、ご近所でできることはご近所で、ご近所の手に余るものは地区が引き受ける、というのも同じ発想です。

●「共助と公助は車の両輪」は間違っていた

しかし、ちょっと考えれば、この発想には疑問があることがわかってくるのです。「住民の助け合いで賄えるところは住民で」まではいいとして、「住民の手に余る」部分は公的サービスで、と言うと、はたしてそうなのでしょうか。住民の力量が増せば、要介護者だって担えるし、食事サービスだって「おすそわけ」という形で、住民の助け合いによって行われている場合もあるのです。問題は、これは住民の助け合いにはなじまないと簡単に結論づけ、早々と公的サービスに持って行ってしまおうことなのです。

だから、要介護者がケアマネジャーのお世話になると、早々とデイサービスや老人ホームへ連れて行かれてしまい、住民はそもそも「助け合い」ようがないというのが現状でしょう。そうではなくて、本人がそれでも自宅で住み続けたいのなら、住民に働きかけて、住民の手で支えてくれるようお願いするのがケアマネジャーの役割であるはずなのです。

長野県の須坂市では一旦要介護家庭のゴミ出しを引き受けたものの、ゴミ出しぐらいいはご近所の人たちにやってもらおうと、ヘルパーが動き出したということです。40数件のうち、残り3、4件を残して、全部ご近所に「返した」と言います。つ

まり「公的サービス」から「助け合い」に返させたのです。

ご近所さんはゴミ出だけでなく、普段の見守りや、家事の手伝いまでしてくれるようにもなりました。ゴミ出しをご近所に「お返し」した結果、住民の助け合いがまた始まっているのです。

●両者の役割を逆に曖昧にする

だから、「助け合いと公的サービスは車の両輪」と、両者の役割を明確に区分しようとするのではなく、むしろその役割のあり方を曖昧にして、逆に公的サービスを助け合いへ戻させるといったことまでやっていくことではじめて、住民力がよりよく発揮されるのです。あれかこれかというデジタル発想が福祉の健全な発展を阻害していたのです。

同じようにして、ご近所でできないことは地区段階で、というデジタル発想も困りものです。ご近所ではできまいと、地区段階で食事サービスやふれあいまつり等のイベントを催すことが、今では地区福祉の定番にさえなっていますが、本来はこれらをご近所の営みに返していくべきです。「限りなくご近所へ」です。

そのために、何十人も集めるような食事会をやめて、一人ひとりの老人にご近所が、その人の食事ニーズに応じて個別に対応するように仕掛けていくことこそが地区組織の役割であるべきなのです。

この「あれかこれか」のデジタル発想は現代人の心に根強く巣食ってしまっているので、お互いによほど気をつけないと、この発想に捕まってしまう、硬直したものの考え方しかできなくなります。

対決的思考

相対する立場で闘わせてみる

福祉関係者は皆、奇妙な「難問」を抱えています。要援護者の中には、ワーカール等に関わられるのを拒否したり、反対に何でも要求したりして担い手を困らせている人が少なからずいて、この人にどのように接したらいいのか、悩んでいるのです。

民生委員の中には、10年も20年も受け入れてもらえず、活動は文字通りの「修業」だなどと、もっともらしくのたまう人もいます。その他にも、地域の人にいろいろ迷惑をかけている人も、最近増えてきました。大声を出す、ラジオを大音量で鳴り響かせる、ゴミ屋敷になっている家、異臭を放つ家—に民生委員は悩まされているのです。

●「迷惑な人」の扱いに苦慮

福祉は、「要援護者へのサービス」だと思っている人が大部分でしょうが、福祉の営みにはもう1つあるのです。自分が要援護状態になったとき、自分の問題を解決するために様々な努力をする—上手に助け手を発掘し、活用する、同じ要援護の人と連帯し、共同で解決するなど。

つまり、福祉は担い手の（助け）行為、受け手の（助けられ）行為の二つによって成り立っているとみたらどうでしょうか。両者が協力し合うことで、よき福祉が成るのです。と考えると、今、福祉が「むずかしく」なっているのは、担い手が助け下手だからではなく、受け手の側が助けられ下手だからだということがわかってきます。

ところが今は、ただ担い手が助け上手になることばかりを考えています。こんなおかしいことはありません。今はむしろ受け手を助けられ上手にさせることに力を集中するべきなのです。

まず子どもの頃から、担い手が助けやすいように、どのように上手に助けられる

か、どのように助け手と協力するかを教えていかねばなりません。ところが福祉教育といえば、ボランティア教育です。ボランティアをさせることを福祉教育とみなしているのです。そんなことよりも、いじめられたら、周りの人に助けを求めることを真先に教えられなければならないのです。

福祉を考えるとき、担い手の側からだけではなく、受け手の側からも考える—双方からバランスよく眺めた時、難問であったものが、そうではなかったことがわかるはずです。

個人情報保護の問題も一面からしか見ていないから、難問が解けないでいるのです。福祉関係者の中には、ただ個人情報を保護することだけを考えている人がいますが、これはおかしい。私たち福祉を担う者は何を置いてもまず困った人を助けなければならないのです。困った人を助けてなんぼの世界が福祉なのです。

しかし、個人情報を保護してあげればあげるほど、対象者の状況が見えなくなります。だから助けることができない。どうしたらいいのか。ここでも一方の側からのみ考えているから行き詰るのです。もう一方の、個人情報保護を主張する当事者の側から考えてみるといいのです。私たちは個人情報保護を主張する人ばかりをイメージしますが、そうでない人もいます。

母が認知症になり、不規則な徘徊を繰り返すために、身内だけでの「追跡」も限界と判断し、母親の写真入りのチラシを町内に配り歩いている人がいます。知的障害の娘が登下校の際にどこかへ行ってしまうことがあるので、登下校途中に接点になっている人たちに見守りをお願いした人もいます。町中の人をお願いするためには、個人情報保護なんて言ってられません。

●両者の相関関係の中で考える

自分のプライバシーを放棄した人には、個人情報保護の問題は初めから存在しないのです。ということは、この問題が生じるのは、当事者がその権利を特に主張する場合なのです。

民生委員や自治会長の中には、当人の意向には関係なく個人情報を尊重しようという人がいますが、当人からしたら「余計なお世話」ということになります。

プライバシーを尊重してあげた結果、当人に孤独死されてしまった町内会長は悔いていました。「死なれてしまえば、プライバシー尊重なんて空しいもんだね」。当

人に「訴えるぞ！」と言われてもこじ開けてしまえばよかったのです。

このように、個人情報保護の問題を、専ら「保護」する側からのみ考えるから行き詰ってしまうのです。自分のいのちを自分で守ろうとできない人には「プライバシーの放棄」を働きかけていかねばならないのです。両者の相関関係の中で柔軟にこの問題を考えていくのが、大事なポイントになるのです。

矛盾も結構

矛盾を矛盾のまま抱え込む

「矛盾」という言葉の由来を、高校の漢文で学んだでしょう。「矛」（ほこ）と「盾」（たて）を売る物売りの口上はこうです。「この矛は、どんな盾も突き通すことができます。この盾は、どんな矛の攻撃も防ぐことができます。」。見ていた群集の一人が、その物売りに聞きました。「その矛でその盾を攻撃したらどうなる？」—物売りは返答に詰まってしまったという話です。

世の中は意外にこんな「矛盾」を抱え込んでいることに、私たちは気付いていません。

●儲けたいと思っはいけないか

ボランティア活動は余暇的に取り組むもの、と誰もが考えていますが、本業中でも顧客なり近隣住民に何らかの“ボランティア”を実行することは可能なのです。その場合、ビジネス行為と重なる部分もあるので、顧客獲得や企業イメージを上げるためにやっているのではという疑問も生じます。そんな「魂胆」がないと言えばウソになります。

問題は、そういう「魂胆」を持つことがいけないのか、という点にあります。一方で人に尽くしたい、もう一方で企業利益を上げたい—矛盾した心情で「活動」をすることになるのは間違いありません。

しかし「儲けたい」と思うからこそ、一生懸命「ボランティア」をしようと思うのも事実でしょう。「ボランティア」をしているうちに、本気で（つまり、純粋な動機で）「ボランティア」をする気になるものです。「矛盾」に富んだ本業の現場で活動するからこそそのメリットなのです。

札幌市の不動産業者が、市内のホームレスの人たちを探し出して、自社の所有している空きアパートに無償で住まわせています。職員と一緒にその人たちの職探し

の協力もしています。首尾よく仕事が見つければ、以降は家賃収入が見込めるわけです。

●消化のメカニズムに見る真実

以前、テレビで胃の消化のメカニズムを見る機会がありました。口からストレートに入ってくる食物を消化するには、よほど強烈な消化剤を粘膜から出さねばなりません。しかし、それでは胃壁自体も「消化」されてしまいます。

そこでどうするのか。まず中和液を出して、胃壁全体を保護した上で消化剤を出す、というきわどい芸当をやっているのです。両液を出すタイミングを間違うと、胃壁がやられて、それこそ胃潰瘍などになります。強いストレスがそのタイミングを狂わせる、とも言われています。

だから、「矛盾」をはらんだ発想を忌避するのではなく、あえてそれを取り込んでいくことで、意外に使い勝手の良い「包丁」を手に入れることができるかもしれません。他の包丁では切れないものも、これで切れば、見事に…というわけです。「矛と盾」を売る者を笑うことはないのです。こういう「ものの考え方」をすることが、今ほど大切な時はないかもしれません。

では、どういう時にこの考え方が役立つでしょうか。今は、「福祉」と聞けば「サービス」という言葉を思い浮かべます。福祉は専門家によるサービスのことだと。一方で「助け合い」という言葉もあります。福祉の原点は、住民による助け合いであったはずですが、それがいつの間にか「サービス」という言葉に変わってしまったのです。

たしかに介護を必要とする人たちを介護の素人である住民が担うのは、荷が重過ぎます。だから「サービス」に委ねるとするのは当然なのですが、問題はじつはその後にあります。

「サービス」に委ねてしまうと、もうそのままサービスを受け続ける—ということになってしまいます。サービスをする側も、少しでも元気になったら地域(の助け合い)へ戻そうとは、まず考えません。そこが問題なのです。「サービス」をしながら、常に一方で地域に戻すことを考え続ける、というセンスが求められるのです。

●相矛盾する概念をすべて飲み込んで頭の中で戦わせる

二つの矛盾する考え方を平等に抱え込むと、「論理的に整理のできない人」と見ら

れる心配があるために、そういうことのないよう、常に自分の頭の中を点検する癖ができていますが、本当はそんな心配はいらないのです。いろいろな相矛盾する概念をすべて飲み込んで、頭の中で両者を戦わせる、それをおもしろがって見ているぐらいのおおらかな姿勢で結構ではないですか。真実というものは、そうした矛盾の中に宿っているのです。矛盾のない考え方というのは、もうそれだけで真実から遠ざかる危険があると言ってもいいでしょう。

グラデーション

黒と白の間に多様な灰色を考える

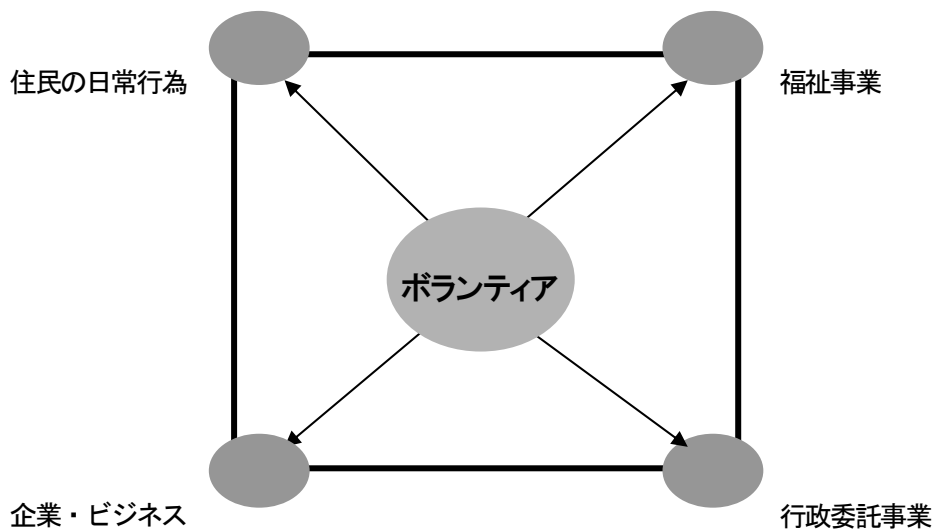
「グラデーション」という言葉をご存知でしょうか。現代用語辞典を見ると、「徐々に変化すること。色調のぼかし」などとなっています。絵画などで真っ黒から真っ白へ急に替えるのではなく、黒が百パーセントから始まって、黒80%白20%、黒70%白30%と徐々に黒中心から白中心に移行させていくことを言います。

現代はコンピューターに代表されるように、物事を「白黒で分けする」ことが絶対ルールになっています。しかしその分け作業によって失うものも少なくありません。

「ボランティア」論議が華やかなりし頃、人間のボランティア的な行為をすべて「無償の余暇活動」に閉じ込めていました。ところがこの枠に入りきれない営みが生まれてきました。例えば非営利の有償活動。誰かが「有償ボランティア」という言葉を使ったら、猛烈な反発が出ました。「ボランティア」ではないが、その要素も一部含まれる営みをどう表現したらいいのか。

●「ボ」と「ビ」の間に何十のヴァリエーション

しかしこのように、新しい言葉を使って新しい営みを説明しようとしたら、それこそきりがありません。なぜなら、ボランティアとビジネスの間の営みには、何十何百通りのヴァリエーションがあるはずですから。そこで私は、下図のようなものを使って説明することにしました。



「ボランティア」というのは一定不変のものではなくて、常にこの4つの方向のいずれかへ発展しているのだと。その一つの方向が「ビジネス」だったのです。

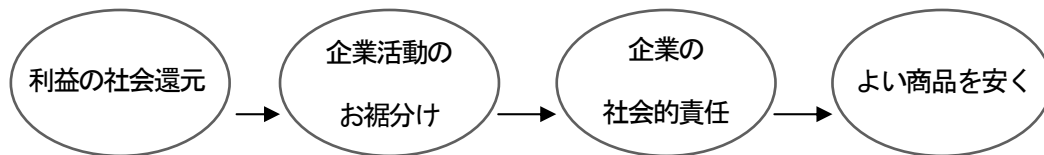
では、そのビジネスへ向けての営みでどこまでが「ボランティア」でどこまでが「ビジネス」なのかとなると、「わかりません」と答えるより仕方ありません。私は「缶ジュース」方式を持ち出しました。缶ジュースを見ると「果汁〇〇パーセント」と書いてあります。この中に果汁分がどれほどの割合で含まれているかを表しています。同じように純粋ボランティアから、純粋ビジネスの間の営みには、それぞれ「ボランティア」分が幾分か含まれているのです。

ボランティアに近い営みにはボランティア分が80～90パーセント含まれており、ビジネスに近い部分の営みはボランティア分が20パーセント含まれていると考えたらどうでしょう。

ボランティアに限らず、物事をこのようにすべて「あれかこれか」ではなく「グラデーション」の視点で見てもたらどうかでしょうか。「あれ」と「これ」の間に段階的にいろいろな状態があると考えerのです。

●社会貢献には積極的貢献と消極的貢献が…

ボランティアと似ていますが、「企業の社会貢献」という言葉があります。通常の営業行為とは別枠で、企業活動による利益を還元するための社会的行為という定義がついています。



しかし、利益の社会還元として、メセナなどに取り組む企業はたいしてありません。もう少しこの言葉の定義をゆるめてみたらどうでしょうか。そこで私はまたグラデーションの視点で、上のような図を持ち出します。

左端はいわゆるメセナなどの、正真正銘の社会貢献ですが、そこから段々と薄まっていくと、顧客サービスなどの中に「活動」を盛り込んだあり方、あるいは「特注対応」「苦情処理」というのも、取り組みようによっては社会に貢献しています。これを「企業活動のおすそわけ」と言ってみました。次はいわゆる「企業の社会的責任」。企業が生じさせた社会問題にきちんと対処すること、あるいはそういう問題を生み出さないような方策を考えること。例えば自動車メーカーなら、事故を起こさない自動車の開発がこれに当たります。

これだけ幅を広げて考えれば、どの企業だって何らかの社会貢献をしているということになります。グラデーションで考えると、物事が曖昧なままで理解されることになり、物足りなく思うでしょう。しかし物事が袋小路に入り込んでいるのは二分法でバツサリ切ってしまうおもうとしているからであって、その解決の糸口はグラデーションの発想ではないでしょうか。

負の視点

すべてに裏側の部分を考えてみる

●危機管理というのは負のライフデザイン

「負」という言葉があります。この言葉の使い方次第で、新しい世界を垣間見ることでもあります。例えば「ライフデザイン」という言葉。自分のこれからの長い時間をどのように有意義に過ごすのか、何年後には自分はどんな仕事をしていきたいのか、といった人生の長期計画を立てることです。

しかし、人生はそううまくばかりが待ち構えているわけではありません。伴侶に亡くなられるかもしれないし、子供が非行に走るかもしれない、自身が老後に寝たきり状態になるかもしれないわけです。「よいこと」への達成計画の立案と並行して、「よくないこと」への十分な備えもしなければなりません。普通これを危機管理というのですが、「負のライフデザイン」と名づけてみました。

例えば「企業の社会貢献」。最近では保険金殺人事件が頻発しています。母子家庭の母親が、親や子供を次々と保険に入れ、殺しては男との遊興費に使っていました。

「保険」は重大な社会問題を生み出す要因にもなっています。

それならば、保険会社のできる社会貢献の一つとして、犯罪を誘発しない、また犯罪者に利用されない生命保険のあり方を考え、実行していくということがありえます。「いいことをする」だけでなく「悪いことをしない」（社会に迷惑をかけない）のも、大事な社会貢献とは言えないでしょうか。前者を正の社会貢献とすれば、後者は「負の社会貢献」です。

●困ったことも福祉問題、豊かさへの障害物も福祉問題

夫在宅ストレス症候群の妻の会、といったグループがあります。夫が家にいると頭痛がすると悩む妻の集まりです。「そんな悩みはぜいたく」と言われそうでしたが、今はこれに共感する女性も多いのです。生活上の困り事というよりは、「私が豊かに

生きるのを阻む要因」なのです。

また「障害児を抱えながら働く母の会」があります。これまでの母の会の人からみたら「ぜいたく！」といわれるかもしれませんが、だれだってこの世に生まれた以上は、豊かに生きたいと願います。そこで、自分なりのライフスタイルを確立します。しかし、いざ実行しようとする、それを阻む障害が出てきます。これが福祉問題なのです。

これまで福祉は、生活の「負」の部分にとりつくものと考えられてきましたが、今やその反対の正の部分充実させ、またはそれを阻むものを除去する行為も福祉とみなすようになりつつあるのです。

ものごとの裏側といえば、私たちが死んだらどうなるのか。魂は「あの世」で生きていると主張する人もいます。それを信じるか否かに関わらず、私たちは「この世」の裏側の世界を半ば意識しながら、ものごとを考えている場合があるはず。福祉という営みも例外ではありません。少なくとも、死へ向けての福祉、あるいは死者のための福祉、肉親に亡くなられた人への福祉と、「あの世」との関係で取り組まねばならない福祉テーマがいろいろ転がっているし、それを無視できない時代になりつつあります。そうやってみると、ジグソーパズルの空白の部分がピタリおさまる、といったことも生じるのです。

ものごとの負の部分、裏側の部分をときどき意識してみると、意外な発想が出てくるものです。

因果を逆転

手段と目的、原因と結果をひっくり返してみる

福祉レクリエーションという領域に関心が集まっています。というと、新たな営みの分野が生まれてきたようにみえますが、福祉の現場ではレクリエーションはお馴染みです。児童関係はもとより、老人関連の施設も含めて、日々さまざまなレクリエーションが実施されています。

●レクリエーション漬けはどうして生まれる？

ところがよく見ると、楽しんでいるのは職員で、入所者は仕方なく「やらされている」といった感じがする場合があります。「レクリエーション漬け」という言葉が浮かんできました。本来は心身を健康にし、イキイキとした生活ができるように勧めるレクリエーションが、入所者にとってはその反対、むしろ苦痛にさえなっている場合もあるのです。

なぜ、こんなことが生じるのでしょうか。職員の感覚の中で、一種の逆転現象が起きているのだとも考えられます。本来は心身のリフレッシュという目的のための「手段」にすぎなかったレクリエーションが「目的」に成り代わったのです。

正常な思考ができるなら、まず入所者をイキイキとさせる要素は何なのかを考え、それをある手段を使って磨いていけばいいわけです。異性とのふれあいがイキイキの要件となれば、お茶のみ友達を紹介する方がレクリエーションを押しつけるよりも効果的なのは間違いないでしょう。むしろお茶のみ友達との交流がその人にとってのレクリエーションなのだと。

●助け合いが目的なのに、手段だった有償が目的に

意外なことですが、私たちの思考の中では様々な面で目的と手段の逆転現象が起きています。

有償の在宅サービス活動は当初、恐る恐る始まったはずなのに、今は「恐る恐る」どころか、福祉の世界でしっかり定着してしまいました。有償ボランティアという言葉の使われ方も、以前ほどには恐る恐るではなくなりました。通常のビジネス活動よりも若干安めの値段で、セミプロ級のサービスを提供するものとして、かなりの市町村で普及しています。

彼らの綱領などを見ると、「互助」とか「助け合い」という言葉が必ずといっていいほど含まれています。もともとは市民の助け合いを起こす仕掛けの一つとして、有償という方式が考えられたはずですが、助け合いという目的を達成するための手段の一つとしての有償であったのですが、いつしか、そのことをすっかり忘れてしまったようなグループが多数を占めています。

●「よい動機」も、活動の後に生まれ出てくるもの

ボランティアの要件として「自発性」「よい動機」が挙げられます。しかし、これに合致した活動ができる人がどれぐらいいるのかという疑問が生じます。

大学生にこんなことを試してみたことがあります。彼らに「どういう条件ならボランティアをするか？」と聞いたら、「単位がもらえるなら」「女の子とデートできるなら」「授業中なら」「お金をくれるなら」と勝手なことを言い始めました。

そこで「では授業中にやってみるか？」と提案。1時間でキャンパス内のゴミを拾うように指示、教室に戻って感想文を書かせてみたら、驚くべきことがわかりました。「僕は生まれて初めて、道に落ちているゴミを拾いました。こんなに気持ちのいい思いをしたのは、初めてです」と感動していたのです。その後日談。数十日して、学部の事務所に行ったら、事務職員から呼び止められました。「この頃学生が登下校の途中でゴミを拾っているんですが、もしかして木原先生のある授業の成果じゃないですか？」

自発性というのは、活動の前に「要件」として設定するものではなくて、活動の後に生まれてくるものなものでした。同じようにして、「よい動機」というのも、活動の前に要求するものではなくて、活動の後に生まれ出てくることも多いのです。ここでも逆転現象が起きていました。

価値を逆転

旧来の価値観を引っ張り返してみる

●自明の価値観も視点を変えれば間違い、ということも

「逆転」にもいろいろあって、こちらは価値観の逆転です。私たちが当たり前のよう
に考えてきた特定の価値観も、視点を変えれば間違いだということがわかる場合
もあるのです。

「障害者」という言葉がありますが、実は実体を反映したものとはいえないのです。
不適切な言葉だと言う人もいます。その理由はいろいろありますが、人間の特定部
位を「障害がある」と言うのなら、ある程度は納得できるのですが、「障害者」と言
うと、その人の全人格を説明したような表現になってしまいます。そんな人間がい
るはずはありません。

その「障害」の部位についても、丁寧に点検していくと、やはり正鵠を得た説明
ではないことがわかってきます。たとえば自閉症の中には、ある空間に点在する「シ
ミ」の一つ一つが気になって仕方がない、という人がいます。その意味では「障害」
であるように見えます。しかし、アメリカではそういう人が印刷所で働いています。
何をしているのか。刷り上がった印刷物にわずかについたシミに彼らは瞬時に気づく
のです。その特殊技能を生かしていたのです。もともと「障害」であったものが、
実は「才能」であったことがわかったわけです。

●能力を生かせない社会の側が「障害者」

舌の感覚が異常に発達していて、ちょっと塩っ気のあるものに耐えられないとい
う人がいます。その意味ではたしかに障害者なのでしょう。現にこの人にはちゃん
とした障害名がつけられているようです。

ところが、さきほどの自閉症の人と同じく、この人も「異常に発達した味覚」を
生かして立派に働いているのです。この「異常」という言葉が曲者です。それはつ

まり、その人の発達した味覚を社会が生かせないときに、この言葉を使っているのではないのでしょうか。問題なのは当人ではなく、社会の方なのです。その能力を生かせない社会の方が障害者なのです。

サヴァン症候群は、高等数学をいともたやすく解いてしまったり、何年前の今日は何曜日だったといった難題に瞬時に答えることができる、といった人間業とはいえない能力を持った人のことです。ある種の能力が異常に発達した人のことです。これも先ほどの論理と同じです。その人の能力を生かせないという自分たちの問題は棚に挙げておいて、相手を「症候群」呼ばわりするのですから、勝手としか言いようがありません。

●当人ではなく周囲の側が変わればいい

イギリスでアスペルガー症候群の人を複数名雇用している企業の話が新聞で紹介されていました。はじめは双方にとって戸惑いの連続だったといいます。その人は、社内の同僚にメールを送って、すぐに反応がなかったらパニックを起こしてしまう。「症候群」であるゆえんですが、企業側の方針を変えました。その人からメールを受け取ったら、その日のうちに返事を出すことを徹底させたのです。これで問題はなくなりました。

つまり、本人を変えるのではなく、会社のほうを変えたのです。おかげでその人はなんと優秀社員賞をもらったというのです。会社もこれに気をよくして、数名のアスペルガー症候群の人を新たに雇い入れたそうです。障害がいつまでも障害であるのは、社会の障害がなかなか治らないからなのです。

こう考えてくると、障害というのは、一つの「個性」と言うよりも、それを飛び越えて「才能」と言うことができそうです。私たちは障害者の能力開発というと、ともかく障害の方は捨てておいて、残存能力の方に目を向けます。

しかし考えてみると、そういう障害者に残された能力と言うと、たいしたものはないのです。障害者の作業所で彼らがどんな作業をしているか、見学すればわかります。手を動かせる、歩ける、しゃべれると言った、人間のもっとも始原的な基本動作みたいなもので、それではたいした役に立たないのは明らかです。

一方で、打ち捨てておいた障害の方に目を向け直し、それを能力として生かせないものかと考えてみたら、意外な展開が見え始めたのです。障害は才能だった！

というように、一般的に言われている、ものごとの価値観をそのまま鵜呑みにするのではなく、それに別の光を当ててみるのです。そこから新しい価値観が生まれくる可能性があるのです。

●失禁は長生きの印。くやしかったら失禁してみやがれ！

妊婦腹は醜いという見方が長い間、社会を支配してきましたが、最近では、妊婦腹のままで結婚式を敢行する女性も出てきました。アメリカの写真家で妊婦腹ばかりを撮っている女性がいます。「妊婦腹は女性の姿で最も美しい」と、それを撮って本人にプレゼントしています。歌手の松田聖子さんが妊婦腹で颯爽とタレント活動を続けていたのを思い出します。それを見て、日本人も少し見方を変えたようです。新しい価値観作りは、流布された価値観を逆転させることから始まるのです。

初めて失禁すると、本人も家族もショック状態になるそうですが、「失禁は長生きのしるし」と考え直せばいいのです。「くやしかったら失禁するまで長生きしてみやがれ」と啖呵を切れればいいのです。物忘れが始まると、これまた認知症の兆候だろうと、ショックを受けるのですが、「物忘れ」がそんなに気に病むことなのか。社会はこれにものすごく敏感に反応しますが、考えてみれば、そんな社会こそが異常です。

自閉症が問題になるのも、今の社会が異常なほどにコミュニケーション能力に重きを置いているからでしょう。人間関係に重きを置く人と、そんなことはたいしたことではないと言う人の双方がいていいではないですか。福祉を考えると、この価値観を逆転させるということが極めて大切です。その行為自体が優れた福祉行為になるとも考えられるのです。

機能主義

カタチよりもハタラキで見る

デイサービスといえは特定の施設を想起するでしょう。その施設でやっていることも大体パターンどおりです。しかし、はたしてそういう「施設」でやっていることだけが「デイサービス」なのでしょうか。むろん制度的にはそういうことかもしれませんが、あらためてこのデイサービスが目指しているものにまで遡ってみると、そういう施設でなければできないということはないでしょう。

●マーじゃん店がデイサービスセンターだった

あるマーじゃん店が、昼間来た老人客の一言、「賭けないからいろんな思い切ったことができるのよ」にヒントを得て、「賭けないマージャンの会」を募ったら、なんと2000人も集まりました。しかも平均年齢は65歳。これだけ老人が集まるにはそれだけの効用があるはずですが、たしかにその通りで、とにかく頭を使うからボケ予防になるし、夜はぐっすり眠れる。手のリハビリになっている人もいます。

このゲームの基本は「ふれあい」です。それが発展して、日曜などには一緒に旅行にも行っています。中には恋が芽生えたカップルもできているという。一人暮らし老人の格好の居場所にもなっているらしく、「明日はお休みだよ」と言うと、「明日はどこへ行こうか…」とつぶやいている老人も見かけるそうです。形は間違いなくマーじゃん店なのですが、実質はデイサービスセンターと言ってもいいのではないでしょうか。人々は、あのミエミエの施設よりは、こうした「隠れた」サービスを求めているのは間違いありません。

●毎晩銭湯で人の服を畳む認知症の女性。としたら…

知り合いの若い女性が銭湯に行きました。湯船に入っていて何気なく脱衣場を見たら、なんと私の服を畳んでいる老人がいるではないか！あわてて戻ろうとしたら、

脇で洗っていた女性が、「放っておきなさいよ。あのおばあちゃん、好きでやっているんだから。私もいつも畳ませているのよ。」と言うのです。

仕方なくこの銭湯の「ルール」に従うことにしました。番台のおじさんに聞くと、毎晩7時になるとやってきて、3時間ばかり「仕事」をすると去っていくという。

「最近ボケたらしくて、服を畳むと気が休まるらしいんだよ」。だから番台から「お客さん、畳ませてあげてくださいよ」と呼びかけているのだそうです。

おそらくそこに福祉関係者が居合わせたら、こう言うのではないのでしょうか。「おばあちゃん、こんな所でそんなヘンなことをやっていないで、デイサービスセンターに行きましょうね」と。そこで歌を歌ったり、踊ったりするわけです。しかしこのおばあちゃんは、この銭湯で服を畳みたいと思っているのです。その方がよほど精神的にはいいと、なによりも本人が自覚しているのです。この銭湯もまた、(この老人にとっては) デイサービスセンターでした！

●本来デイサービスは何を目指しているものか

カタチよりも実質で見ましようということです。私たちは普段、どうしても形にとらわれます。デイサービスというものは、こういう施設でこういうことが行われている所、と頭で考えてしまうのです。しかしそこで「待てよ」と立ち止まる。もともとデイサービスというのは、何をを目指しているものなのか、本来の目的は何なのかと、本質まで遡ってみる。要するにその本質に違わなければ、少しぐらいカタチが違ってても、デイサービスと言っているのではないのでしょうか。

一旦本質まで突き進んで、もう一度立ち戻ってみます。カタチよりも実質的にそれが果たしているハタラキに目を向けてみる。そうすると、「なんだ、銭湯だって、この老人からしたら立派なデイサービスセンターではないか」と気がつくのです。

こういう境地になるには、いつもカタチとか、コトバにとらわれず、そこから自由になって、真っさらな目でものを見るという努力が必要なのかもしれません。その具体的な方法の一つが、これまでの事例の中に含まれています。いったいなぜマージャン店や銭湯がデイサービスセンターに見えたのか。それらの店をそうと認知したのは、そこへ来ている老人でした。自分自身の目でなくそれぞれの当事者(ここでは老人)の目から見ればいいわけです。その人がそうと認めた対象が、デイサービスセンターだと考えればいいのです。

首尾一貫

当初の理念・考え方を愚鈍に押し通す

今の福祉のあり方の大事なポイントの一つは、自立を支援すること、でしょう。そのことは活動家たちも承知しているはずなのに、行動は自立支援とは逆の方へ向かってしまいます。

老人保健施設は中間施設ですから、3ヶ月したら自宅へ返すのが基本原則です。しかしこの原則はほとんど守られていません。一旦この施設へ入ったら、あとはあちこちの施設をたらいまわしされて、自宅復帰は夢のまた夢となってしまうのが通例です。

●福祉の基本は「自立支援」ではなかったのか

あるとき老人保健施設の所長に「もし本気で自宅へ帰そうと思ったら、どうしますか？」と尋ねてみました。答えは「(入所中に) ときどき自宅へ帰してみる」。少なくともそれぐらいのことをしておかないといけないぐらいはわかるはずなのです。つまり、施設側は本気で家へ帰す気がない、ということです。

頭の良し悪しではなく「ものごとを首尾一貫して考える」ことを、結局、ある時点で放棄してしまうところに問題があるのではないのでしょうか。対象者が少しでも自立する気になったと判断されたら、あるいは要介護度が下がれば、すかさず自宅復帰を検討する、そういう姿勢が、今の福祉施設の職員に欠けているのです。

●「当事者主体」なら当然これを徹底するべし

私たちはある命題を（自信を持って）打ち立てても、その命題で他のすべての事象を眺めてみる、ということまで徹底できません。一般市民であろうと、学者であろうと、その点では変わりがないのです。

介護保険制度の中には、福祉の大変革を促す発想が含まれていると言われます。

「措置から契約へ」という流れもその一つです。今までは「お上」からのお仕着せの福祉であったが、これからは当事者（サービスの利用者）が自分が受けたいサービスを選択できることとなりました。その選択の枠は相も変わらず「お上」から決められるが、それに対しても「不服」を申し立てることもできます。

「選べる福祉」が最新の福祉をシンボライズする言葉になりましたが、この発想をこんな宙ぶらりんの位置に固定させておくことはないでしょう。「選べる」ということは福祉サービスの主

導権が事実上、当事者（利用者）の側にあると言い換えてもいいわけです。福祉というのは、そこに福祉問題が生じるところから出発します。問題を抱えた当事者から、福祉は発するのです。その人が自身の問題を意識し、どう解決すべきかを考え、外に向って表現し、誰にどう助けを求めるかを考え行動に移す。自分向けの資源を発掘し育成し、とりまとめ、自分へ振り向ける。こうした一連の福祉のプロセス全体の主体者は当事者だと徹底して考えるのです。

東京・府中市の島村八重子さん(写真右)は、マイケアプラン運動を主催しています。当事者主体ならば、ケアプランは自分や家族が作るべきだということです。なにもケアマネジャーに「丸投げ」することはないと。舅や姑(写真左)のケアプランも彼女が作ってしまいました。

ここまで来れば、すでに一つの大きな発想の核まで到達したとみていいのです。

「選べる福祉」になったということは本来、物凄い福祉革命であるはずなのに、だれもそうした意識をなかなか持てないのです。首尾一貫していないのです。

初めは確かに当事者主体だったのに、途中からぐらついてきて、しまいにはそれと全く反対の考え方に行き着いてしまう。人間の頭脳というものは、こう見ると、頼りないなとつくづく思います。

言葉にご用心

あなたを縛る「鎖」が隠されている

ある団体が実施した、定年退職直後の人を対象にした社会参加に関する調査の回答を見ていたら、「社会参加」というのは具体的にどういうことを指すのかがよくわからない、という声が出ていました。同じように「あなたは今、地域でどんな社会活動をしていますか？」と問われても、その「活動」は何を指すのかがよくわかりません。

●「活動」という言葉が、ある種の行為を示唆

「わからない」なりに、この言葉の与えるイメージに従うと、「私はまだ活動と言えるほどのことはしていない」という回答が多くなります。「活動」という言葉が、ある種の行為を示唆しているからです。

ところが、回答文の他の箇所を見ると、町内会の役員をする「ぐらいなら」とか「向う三軒の人たちへのちょっとした世話なら」とか、趣味活動をグループで楽しみ、その中でいろいろ仲間の世話を焼くぐらいならやっていると言っています。

「活動」への「参加」と言ったとき、私たちは頭の中に、地域の特定の場所に特定の活動をすることを目的（それだけが目的）として参集する、といった意図的な行為を思い描くでしょう。そういうことなら、「私は活動していない」となってしまうのです。

東京・小平市のK子さん(写真右)は、足元で「活動」らしき行為を見つけると、その人に言ってあげています。「あなたのやっていることは、立派なボランティアなのよ」と。

●「ケア」や「サービス」に一方的福祉が示唆

同じように、「ケア」とか「サービス」という言葉を安易に使うために、福祉とい

うのは「困った人（要援護者）を助けること」だと、そればかりを考えてしまいます。言い換えれば、福祉という営みは、「助けと助けられの二つの行為の関わり合いである」といった考え方は、これらの言葉を無神経に使ってはいは、なかなか出てこないのです。

福祉の営みは、(本当に対象者の立場を考えるなら) できるだけ「それらしく見せない」のがルールであるのに、先程の「活動」という言葉を使っていると、そういう配慮をしようという気持ちが起きなくなります。

活動は、いかにもそれらしいミエミエの行為、というニュアンスがありはしないでしょうか。この言葉は、福祉の主体者は担い手であるといった発想を内包しているようにみえます。担い手の立場で福祉の全体を考えるなら、相手の都合を配慮する必要はそんなに感じないはずですが。

今の福祉は、担い手主導という観点から作られていますから、使われる言葉にも、その考え方が含まれています。その反対に受け手主導でものを考えていきたいならば、いまの福祉用語のほとんどすべてを引っ繰り返して使うか、またはまったく違う言葉を作り出すかのどちらかを選ばなければならないはずですが。

言葉というのはかくのごとく、私たちの思考機能を硬直化させたり、特定の考え方を自動的に押しつけたりする、という意味ではオソロシイ存在なのです。

●すべての言葉に自分流の考えを吹き込め

言葉の金縛りに遭わないためには、とにかく言葉に対して、絶対に主導権を確保するという強い姿勢を持つておくことです。すべての言葉は自分流に解釈するぐらいの身勝手さでよいのです。すべての言葉に自分流の考えを吹き込み、他者にも伝えていくのです。

社会は「言葉」という武器を使っての、各自の考え方の押しつけ合いの戦争だと考えたらいいでしょう。皆が使っている言葉を無防備に使っていたら、相手の考え方に支配されてしまうのです。

風土を分母に

人間の行動を文化・風土の中で読む

福祉の世界にもチェックアンドバランスが機能しなければならないということで、オンブズマンの制度が広がっています。しかし日本という国が、オンブズマンというあり方を認めるかどうかは、やはり疑わしいものです。

●日本文化は「オンブズマン」を受けつけない

先日、オンブズマンの研究集会で、こんな悩みが披露されました。福祉施設の入所者に「悩みがあったら、勇気をもってこちらに言ってきてください」といっても、なかなか応じない。施設という世界そのものも、外部の者には入りにくい。見えない壁のようなものがある、というのです。これはどういうことか。施設の入所者にとっても、オンブズマンはよそ者だったのです。よそ者に身内の問題を訴えるなんて、とてもできるはずはなかったのです。

日本では、内部チェック、つまり身内によるチェックは受け付けます。自民党をチェックするのは派閥均衡という不思議な力学そのものです。いかにもチェックしたように見せないあたりも日本的です。消費生活アドバイザーが企業に雇われているというあり方だって同じことで、これで本当のチェックはできるものなのか、疑わしいと見られますが、しかしこの方式を変える気はないようです。

では、どうしたらオンブズマン的な存在を日本という国で定着させることができるのだろうか。こういうときに、「なにか日本的な解決法があるはずだ」と考えると、そこから意外な答えが出てくるときもあります。とにかく「一応身内でありながら、チェック機能もある意味で果たしている」存在を頭に描いてみたらいいのです。

例えば福祉施設の場合はどうか。そこで思いつくのが「ボランティア」です。一面ではわが施設の味方、そしてある面では施設監視的な機能も果たしている。

川崎市で活躍する介護ボランティアグループ「すずの会」は、特別養護老人ホー

ムに出向いて「喫茶コーナー」を開いています。それだけでなく、入所者の要望を施設側に伝えたり、家族と本人の橋渡しをするなど、多彩な役割を果たしています。施設と入所者の両者に信頼された彼女らが、最適のオンブズマンを果たしているというわけです。

●隠し味としてのボランティアが日本的なパターン

「ボランティア」自体が、日本の風土では受け入れがたいものです。「だれにも頼まれずに、すすんで地域社会のために貢献しようとする」。こういう表現にピッタリの（日本的）用語は、「お節介」「でしゃばり」。そういう人こそ嫌われてしまうのです。だから「ボランティア」をしなくていいというのではなく、まずはそういう風土であることを頭に入れる作業が欠かせないということです。そのうえで、ではどういふ対策を講じるのか。

日本的なボランティアのあり方があるのではないかと考えていけばいいでしょう。そうすると、一見「自らすすんで」ではなくて、「誰かに頼まれたり促されたり」して活動に踏み込むというあり方が、この国ではごく普通に行われていることに気付くはずです。普通、役員などを決めるときは、「立候補」などといった野暮な手段はとりません。輪番制とか、みんなから「お願い！」といわれてしぶしぶ役を引き受けるという形をとります。しかし、実は本人もそれほど「しぶしぶ」ではないというところがミソなのです。

もっと面白いのは、本業中での取り組みというあり方です。一般に、ボランティアといえば余暇、すなわち仕事を終えて、わが家に帰ってから始めるものということになっていますが、むしろ本業でやる部分にボランティア的な色合いがあるのです。顧客サービスの中にボランティアが隠されているのです。本業中に、業務の一環として取り組んでいるように見える、つまり業務中の行為ですから、誰にも「お節介」とは言われません。ごく当たり前に取り組みながら、実質的にはボランティアをしたのと同じなのです。隠されたボランティア、隠し味としてのボランティアが日本的なパターンだと考えたらどうでしょうか。

このように福祉の取り組み方を考える時、必ず日本の文化・風土の土俵に乗せてみたらいいのです。そこから出てきた答えが、住民流だと見て間違いないでしょう。

人間というものは…

まずは人間論からはじめよう

福祉は本当に進歩しているのか、疑わしくなる事件が頻発しています。児童をはじめ、障害、老人関連など、ほとんど全ての業種で、虐待事件が起きています。こんな状況を受けて施設関係者や監督官庁はどのような対策を講じているのかとみると、相変わらず「職場の綱紀粛正」そして「研修」だけ。要するに精神論に帰してしまっているのです。

●利用者への虐待は起きるべくして起きている

なぜこんなにも虐待事件が起きるのか。これを人間論から見れば、どうということはない、まことに単純な理由があるのです。「絶対的な権力は絶対的に腐敗する」とローマ時代の哲学者が既に喝破していました。密室で超強者と超弱者だけが相対していたら、超強者による横暴が「絶対的に」実行される、ということ。そして、それは個々の人間の資質とは関係ないということ。「研修」なんぞで防げるなどと甘い考えを持ってはいけないのです。

となると、超弱者だけを集めて、それに超強者たる職員だけを密室の中で対峙させるという、福祉施設というあり方そのものに問題があったのです。こんな当たり前の真実がなぜわからないのか。福祉の世界では人間論が置き忘れられている。ここに最大の問題があるのです。

●人間は、助けてもらう側の立場には絶対立ちたくない

人間は、助けてもらう側の立場には絶対立ちたくない、と必死に考えています。「思いやりの心」とよく言いますが、じつはそれはきわめて難しいことなのです。相手の立場になろうという気持ちと、なりたくないという気持ちが闘っていて、結局、「なりたくない」が勝ってしまうのです。だから何十年、ボランティア活動をして

いても、「相手の気持になる」なんてほとんど不可能と言えましょう。

下の写真は、伊豆半島にあるデイサービスセンターです。中に入ると、トレーナー姿の高齢者がちょうど空き缶つぶしをしていました。それを見学している一人の女性が眼に入りました。ベレー帽をかぶり、水玉模様のワンピース。口紅も付けていて、私はてっきり見学者だと思ったのですが、この女性も利用者の一人でした。

長い間教師の職に付いていて、プライドは人一倍高い。この人にとって「自分も利用者の一人」というのは耐え難い屈辱なのでしょう。「私はボランティアとして通っているのだ」と言い張り、施設もそのように扱っていたのです。

そこで、福祉活動をするとき、その場面場面で、「人間というものは…」と人間論をやってみることをお勧めします。こちらがサービスを提供しようというのに、それを拒否する人がいる。「一体どういうことなんだ？」

そんなときに、ああ、人間にはプライドというものがあるんだな。サービスを受けることは、同時にプライドを潰されることなんだ。では、相手のプライドを潰さないサービスのあり方って何だろう。そう、むしろその人を担い手の立場になれるように仕掛けてみるか。というようにして、よりよい解決策が見つかるのです。

●人間論に基づけば、改めて「住民流」を学ぶ必要はない

住民はじつは、この人間論に則って福祉行為をしているのだと言ってもいいかもしれません。地域社会は人間と人間の関わり合いの場であり、それがスムーズに進むということは、とりもなおさずお互いが、人間というのはこういう性格を持っていて、こういう場合にはこういう反応をするといった正しい人間論に基づいて行動しているからなのです。

ところがそこに福祉関係者が踏み込んで来て、人間論を無視したシステムやサービスを作り出し、それに無条件に従うことを住民に要求しているのです。無茶というものです。いくら「住民のため」とはいえ、地域社会、すなわち住民の世界に入っていく以上、常に正しい人間論に立ってサービスなりシステムづくりをすべきなのです。そうなのです。関係者が人間論に基づいて福祉を実行していけば、なにも改めて「住民流の福祉とは何か」などと研究する必要はないのです。住民の流儀などというものはなくて、人間論に基づいた福祉があるというだけのことなのです。